

ペスタロッチー教育賞 受賞団体紹介

特定非営利活動法人 学習障害児・者の教育と自立の保障をすすめる会

みはらしだい がくえん
見晴台学園

義務教育段階を終えた後も、人は自分自身の「発達課題」に応じて学び続ける権利を有する。見晴台学園はこの権利を保障すべく、1990年に発足した「学習障害児の高校教育をもとめる会」(後に「学習障害児・者の教育と自立の保障をすすめる会」に改称)を中心として、名古屋市に無認可5年制高校を開校したことに始まる。

障がいのある子どもたちの学びの場を保障する制度は、長きにわたる運動によって実現・拡大してきた。インクルーシブな社会や学びへのアクセシビリティが注目される中、特別支援学校・学級の設置や大学への多様な進学機会の充実が進められてきた。その一方で、障がいの程度など様々な理由から、中学卒業後に「通常」学校に通うでもなく、また特別支援学校に通うでもない子どもたちには、実質的な学びの場とその機会の保障は十分になされてきたとは言いがたい。見晴台学園は制度の狭間にあって光があてられてこなかった、障がいのある青年の学び続ける権利をボトム・アップで支える取り組みの嚆矢である。

見晴台学園の特徴は、単なる「居場所づくり」に終わらず、誰もが自分にあった学びを見つけ、「みんなが輝く」ことのできる授業づくり、カリキュラム設計を行っていることである。「言語と数量」「自然と社会」「技術と人間」「芸術と文化」「運動文化とからだ」という従来の教科の枠を越えたカリキュラムや「研究論文」の制作・発表、生徒・保護者・教師による「評価票」づくりなどの取り組みは、生徒一人ひとりがゆっくりにじっくり学ぶ場の創造を可能にしている。「あきるほど待つ」という教師の語りに見られるように、カリキュラムは生徒の「わからなさ」に応じて見直されていく。また、通常よりも長い授業時間や一日を通して全校生徒で話し合う「みはらしタイム」に示されるように、一人ひとりのニーズに合わせて学ぶことを実現するとともに、ひとりだけで解決



するのではなく、互いに認め合い・助け合うことのできる学校づくりが目指されている。

それぞれが自分にあった学びを生涯にわたって追求し生きていく権利を尊重し、その場を保障しようとする見晴台学園の姿勢は、2001年の青年部および卒業生支援のための自立支援センターの設立や、2013年の高校・高等部卒業者のための見晴台学園大学(法定外)の開設、そして2023年度からの高大一貫制の実現につながっている。確かに同学園は無認可の学校であるがゆえに、一般的な学校に対する教育予算の支援は得がたい。それでも、福祉分野の支援を受けながら、学び、意見を表明する権利をすべての者に保障すること、とりわけ学齢期を過ぎた青年期における学びの保障の重要性を提起することで、今日多様に展開しつつあるフリースクールをはじめとしたいわゆるオルタナティブ・スクールの「教育と福祉の越境」を印づける、一つの草分け的な存在としてあり続けている。

以上、設置の形態や設置場所などを変えながらも、34年にわたって社会の中で周辺に置かれていた子どもや若者たちに手を差し延べてきた見晴台学園の取り組みは、貧児・孤児のためにシュタンツやイヴェルドンに孤児院を設立し、どの子どもにも教育の可能性を見てとったペスタロッチーの思想と実践に通じるものである。見晴台学園の長年の活動に対し、第32回ペスタロッチー教育賞を贈呈し、高く顕彰したい。